



TITLE:

古代メソポタミアの粘土板

AUTHOR(S):

前川, 和也

CITATION:

前川, 和也. 古代メソポタミアの粘土板. 静脩 1999, 35(3): 2-3

ISSUE DATE:

1999-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37511>

RIGHT:

chasing policy seems erratic: there are some short incomplete runs (wasteful of resources). And I wonder if there is a policy on when and how (perhaps even on whether) periodicals should be bound?

Systematic, orderly and consistent classification of its holdings is one of the prime requirements for any library. In the west, two main cataloguing systems are in standard use: the Library of Congress system and the Dewey system; however, some libraries do use their own idiosyncratic methods. In the Bungakubu library, classical literature is arranged according to author: after the main bank of texts (Teubner, Budé etc.) which have the prefix 1, and a bank of collections of fragments which have the prefix 2A, the authors begin. Thus, Aeschylus is 2B Ae3 and Euripides 2B Eu2; duplicate copies are labelled. But how are books arranged under these authors? Texts with commentaries, translations, and works of criticism are mingled, and the main criterion for arrangement seems to be date of purchase. A reader interested in the Oresteia might not notice an important recent commentary on the Choephoroi; and the Euripidean commentaries are similarly not easy to locate among more ephemeral background material. And, inevitably, arrangement becomes still more haphazard where books on

subjects such as society or religion are concerned. There seem also to be delays between the purchase of a book and its appearance on the library shelves.

I am not a typical user of the libraries of Kyoto University. I have been shielded from many difficulties by exceptionally helpful colleagues, and (let it be admitted) by a certain amount of professorial privilege. And I have been able to arrange my work schedule so that I can use western libraries to supplement the local holdings. My lack of Japanese is not typical, but neither is it unique. Japanese users, and those with a good knowledge of kanji, doubtless navigate the labels on the shelves with ease. However, there must be many visitors who quietly despair of ever finding even the section they are looking for, never mind a particular book in that section; and the problems of using the online catalogue are formidable.

Still, Kyoto has one of the best – perhaps it is the very best – of classical libraries in Japan and on the whole I have been more surprised to find works present here than absent; and have welcomed the opportunity to browse on the open shelves. The problems of fragmentation which I have encountered relate more to general library arrangements than to problems in my own discipline. (クレイク、エリザベス メアリー)

古代メソポタミアの粘土板

人文科学研究所教授 前 川 和 也

もし、〈書物〉を、文学作品などが印刷されている複数の紙葉が綴じあわされているもの、と定義してしまえば、古代メソポタミアの粘土板はとうてい〈書物〉(しょもつ)とは言えません。さしあたって、ここでは〈書物〉を〈書かれたもの〉、つまり文字、文章が記録される媒体を指すというふうに、もっともゆるやかに理解しておきましょう。じっさい、世界の歴史のなかでは、東アジア世界をのぞけば、さきほどの厳密な定義に合致するような〈書物〉(しょ

もつ)を利用できたのは、かなり新しい時代にはいつてからのことなのです。いっぽうで粘土板は、紀元前4千年紀の末から紀元後1世紀後半まで、記録媒体として用いられました。粘土板は、さまざまな書写材料のなかで、もっとも長いあいだ利用されつづけたのです。

現在までに発見されている粘土板の総数は、50万枚ちかくにのぼるでしょう。前1千年紀、新アッシリア帝国時代の浮き彫りには、セム系アラム語アルファベットを羊皮紙に書き写して

いる書記と、ワックスをかけた木板に楔形文字を書きこんでいる書記とが並んでいるシーンがしばしばみられます。けれども、それ以前のメソポタミア社会では、記録媒体は基本的には粘土板でした。シュメール語やアッカド語が、楔形文字で粘土板に刻みこまれたのです。新アッシリア時代でも、木板の楔形文字は、のち粘土板に書き写されたはずです。

最古の粘土板は、前4千年紀の末から3千年紀はじめにかけてのシュメール遺跡ウルクで発見されています。ウルクから出土した数千点の粘土板のうち、8割以上は行政・経済文書です。王宮や神殿の奴隷や家畜を数え、穀物の量をはかり、耕地の面積を計算するために、粘土板記録が成立したのです。ウルク古拙文書のうち、あとの約2割ちかくは「リスト」です。同ジャンルの言葉（たとえば官職名）が羅列されているのです。書記養成の教材として、「リスト」が成立したのかもしれませんが。官職名「リスト」にいたっては、その後約千年にわたって、同一内容のテキストが西アジア各地で書かれつづけます。言及される諸官職の順番さえ、最初期の「リスト」での原則が厳密に守られています。

いっぽう、王碑文といった政治的記録や文学テキストなどの成立は、前3千年紀の中頃まで待たなければなりません。なお、王碑文や土地・家屋の売買契約は、しばしば彫像、石板、石柱、粘土〈釘〉、石製・粘土製容器など、粘土板以外の媒体にも刻みこまれるようになりますが、いうまでもなくこれらは二次的な発展です。

最古のテキストのおおくが行政・経済文書であったという事実は、その後の粘土板記録の歴史を象徴しています。出土した約50万枚の粘土板のうち、9割が行政・経済記録でしょう。したがって粘土板記録を保存する場合は、まず文書庫（アーカイヴ）なのであって、図書館・図書館（ライブラリー）といえるような施設は、数多くは存在していなかったにちがいない。メソポタミア都市とりわけ前3千年紀のシュメール都市には、かならず公的な文書庫があって、そこには多数の行政・経済文書が収められていたはずですが、残念ながら、考古学者によって文書庫がきちんと発掘された例は、きわめてまれ

です。だから、1970年代にイタリア隊がシリアのエブラ遺跡で前3千年紀後半の文書庫と数千枚にのぼる粘土板を発見したというニュースは、すぐに世界中に大々的に伝えられたのです。

いっぽう、図書館と定義できる遺構の発見は、前1千年紀のメソポタミアに限られています。前2千年紀のはじめ（シュメール文化が減んだ直後の時代です）の南部メソポタミア都市、とりわけウルやニップールからは、大量のシュメール文学テキストが出土しています。けれども、これらは図書館跡ではなく、私的な諸家屋（おそらく私塾）跡から発見されているのです。これらは、書記養成のための教材や生徒の練習テキストです。当時、私人が趣味で文学テキストを集めていたとはどういえない。いっぽうで書記の卵たちは、シュメール語をじつに熱心に勉強していました。

さて、われわれが知っている最古のシュメール文学テキストは、おそらく前26世紀に成立していますが、これらのほとんどは「ことわざ」集成です。では、なぜ最初に粘土板に書かれた文学テキストが知恵文学ジャンルに属していたのでしょうか。一部の研究者は、叙事詩や知恵文学は、粘土板に書き写される以前に、口頭伝承の長い歴史をもっていたことを証明しようとしています。前26世紀に書かれた短い叙事物語的なテキストも、1点だけですが、見つかっています。けれども、これらは例外的な発見です。前2千年紀以前にシュメール語で書かれた文学テキストの数は、ごく少ないのです。これは偶然なのでしょうか。図書館跡が発見されていないからなのでしょうか。そうではなく、口頭伝承が、シュメール時代が終わるまで続いたからだと考える人さえいます。前2千年紀にはいて、セム人の書記たちが、シュメール文学をいっせいに文章化したというのです。

現在のわたしには、これらの問題に答える能力はありません。ここでは、われわれが、〈書物〉（しょもつ）という語で想像できるような文学作品を記録するために粘土板が成立したのではないという事実だけを、くりかえしておくにとどめます。（人文科学研究所1998年夏期講座「モノとしての書物」より）（まえかわ かずや）